

心象風景

函館五稜郭病院
たけむらそう たろう
竹村壮太郎

はじめまして。函館五稜郭病院初期研修医1年目の竹村壮太郎と申します。今回は2年目の先輩からこちらのエッセイのお話をいただき担当させていただき次第です。僕は恵庭市という小さくも大きくもない、片田舎でもなければ都会でもない、そんな丁度いい街の出身です。高校は北嶺高校に通い、その後札幌医科大学へと進学して、こうして函館で働いています。そう考えると生まれてからこの方、ずっと北海道で暮らしていることになりませぬ。

僕は海のない街の育ちだったので、この歳になっても海沿いに来るとなんだかわくわくします。雄大さ、荒々しさ、色調、どれをとってもその瞬間にしか存在しない個性が海にはあるような気がします。そこで本稿ではこれまで旅行で行った様々な海について書こうと思います。

一つ目の海は、3月の吹雪のなか、長万部駅すぐ近くの防波堤から見た大荒れの海です。暇を持て余していた大学5年生の当時、普通列車に乗って札幌から小樽や倶知安を回り、室蘭まで下ってから再び札幌に戻るといふ非常に気の長いお出かけをしたことがありました。電車好きの方はご存じかと思いますが札幌から長万部へと向かう鉄路は太平洋側の室蘭本線（こちらの方がメジャーで特急もこちらを通ります）と日本海側を通るルートとの二つがあり、二つに分かれた路線が合流する地点がちょうど長万部駅です。長万部はカニ飯が有名でこちらで途中下車。カニ飯屋さんには海の手すぐ近くで、荒天にもかかわらず営業してくれていたことは今思えば奇跡的だったと思います。にしてもすごい音なんです、これが。カニ飯屋さんの中にもお腹が揺れるような重低音が海の方から聞こえます。防波堤から海を見ると、そこには黒々としたうねりに乗って、白波がまるで生き物のように暴れまわっていました。飛び込めばほんの何秒かでバラバラになること間違いなしのパワフルさ。体の芯まで寒くなるような、まるで海中に浸かったような恐怖を感じ、早々に駅舎に引っ込んだことを覚えています。

二つ目の海は、11月の晴れた日、苫小牧から八戸までのフェリーが到着する直前、朝焼けに照らされた八戸港沖の海です。海が好きな僕はフェリーに乗るのも大好きです。真っ暗で海面と景色と夜空が一緒くたになってまるで宇宙旅行をしているかのような、不思議な浮遊感のある乗り物だと思っています。加えてですが、陸から離れば電波が届かなくなるので、一人旅であればなおのこと何にもつながら

恵庭市出身、札幌医科大学卒で部活は弓道部でした。この春からは函館五稜郭病院で研修医1年目。趣味は旅行で、函館にいるうちに東北各地を巡りたいです。写真は学生時代によく行っていたおたる水族館にて。



いという現代では貴重な贅沢を味わうことができませぬ。もうすぐ八戸に着くという朝7時くらい、デッキに出てみると朝焼けとまるで鏡のように凧いだ冬の海が広がっていました。長万部の海とは対照的に、作り立てのコーヒーゼリーのようにつややかで、少しの振動も混ざらない金色の平面。そして陸では決してみられない180度以上の全く何もない視界に、太陽だけが息吹あるものとして浮かんでいました。その景色も埠頭の波消しブロックや貨物の積み下ろしの音などで、すぐに消えてしまいましたが記憶の中に写真のように残っています。

最後にご紹介するのは、夜の函館の海です。近年ではすっかり漁獲量が減ってしまいましたが季節によってはイカ釣り漁船の漁火が遠くに見えます。学生のころ実習で函館を訪れた際に、週末の空いた時間でいさりび鉄道という地元のローカル線に乗って木古内駅まで出かけたときのことです。その当時、いさりび鉄道では夜の海に浮かぶ漁船の明かりを楽しむ、というコンセプトのもと一定区間車内の明かりを消して走行するというイベントを行っていました。普段は煌々と照らされる車内の明かりが消えると、函館湾の沖遠くに数個の光が灯っていました。季節はまたしても冬。冷たい海の上で、こんな夜更けにも関わらずその光は力強く、存在感を放っていました。あ〜、世の中にはこんなに厳しい環境でも頑張れる人がいるんだな、そういう力強さって大事だよな…と。以来、踏ん張り時が来るたびにあの時見たイカ釣り漁船に負けまい、と自分を励ますようになりました。我ながら単純な人間だなと思います。

さて、とりとめもなく海の話をしました。はっとする光景は思いのほか記憶に残るものですし、おおらかな気持ちでいるうえでとても大切なように感じます。書いてみると思いのほか筆が乗りました。最後まで読んでいただいた方、ありがとうございます。これを読む先生方にとっても、僕にとっても、次にどきどきする光景に出会えるのはどんな時でしょうか。楽しみは尽きませぬ。